

妙法蓮華經。 信解品。 第四

爾の時に慧命須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連、佛に従いたてまつりて聞ける所の未曾有の法と、世尊の舍利弗に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうとに希有の心を發し、歡喜踊躍して、即ち座より起つて衣服を整え、偏に右の肩を袒にし右の膝を地に著け、一心に合掌し曲躬恭敬し、尊顔を瞻仰して佛に白して言さく、

我等僧の首に居し、年并に朽邁せり。自ら已に涅槃を得て堪忍する所なしと謂うて、復阿耨多羅三藐三菩提を進求せず。世尊往昔の說法既に久し。我時に座に在つて身體疲懈し、但空・無相・無作を念じて、菩薩の法の遊戲神通し、佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、心喜樂せざりき。所以は何ん、世尊、我等をして三界を出で、涅槃の證を得せしめたまえり。又今我等年已に朽邁して、佛の菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念好樂の心を生ぜざりき。我等今佛前に於て、聲聞に阿耨多羅三藐三菩提の記を授けたもうを聞いて、心甚だ歡喜し未曾有なることを得たり。謂わざりき、於今忽然に希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す、大善利を獲たりと。無量の珍寶、求めざるに自ら得たり。世尊、我等今者樂わくは譬諭を説いて、以て斯の義を明さん。

譬えば人あつて、年既に幼稚にして父を捨てて逃逝し、久しく他國に住して、或は十・二十より五十歳に至る。年既に長大して加復窮困し、四方に馳聘して以て衣食を求め、漸漸に遊行して本國に遇い向いぬ。其の父先より來、子を求むるに得ずして一城に中止す。其の家大に富んで財寶無量なり。金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・頗黎珠等、其の諸の倉庫に悉く皆

盈溢せり。多く僮僕・臣佐・吏民あつて、象・馬・車乘・牛・羊無數なり。出入息利すること乃ち他國に徧し。商估・賈客亦甚だ衆多なり。

時に貧窮の子、諸の聚落に遊び國邑に經歷して、遂に其の父の所止の城に到りぬ。父毎に子を念う。子と離別して五十餘年、而も未だ曾て人に向つて此の如きの事を説かず。但自ら思惟して心に悔恨を懷いて、自ら念わく、老朽して多く財物あり。金・銀・珍寶、倉庫に盈溢すれども、子息あることなし。一旦に終歿しなば、財物散失して委付する所なけん。是を以て懇懃に毎に其の子を憶う。復是の念を作さく、我若し子を得て財物を委付せば、坦然快樂にして復憂慮なけん。

世尊、爾の時に窮子、傭賃展轉して父の舍に遇い到りぬ。門の側に住立して遙かに其の父を見れば、師子の牀に踞して寶几足を承け、諸の婆羅門・刹利・居士、皆恭敬し圍繞せり。眞珠瓔珞の價直千萬なるを以て其の身を莊嚴し、吏民・僮僕手に白拂を執つて左右に侍立せり。覆うに寶帳を以てし諸の華旛を垂れ、香水を地に灑ぎ衆の名華を散じ、寶物を羅列して出内取與す。是の如き等の種種の嚴飾あつて威徳特尊なり。窮子父の大力勢あるを見て、即ち恐怖を懷いて、此に來至せることを悔ゆ。竊かに是の念を作さく、此れ或は是れ王か、或は是れ王と等しきか。我が傭力して物を得べきの處に非ず。如かじ貧里に往至して、肆力地あつて衣食得易からんには。若し久しく此に住せば、或は逼迫せられ強いて我をして作さしめん。是の念を作し已つて、疾く走つて去りぬ。

時に富める長者師子の座に於て、子を見て便ち識りぬ。心大に歡喜して即ち是の念を作さく、我が財物・庫藏今付する所あり。我常に此の子を思念すれども之を見るに由なし。而る

を忽ちに自ら來れり。甚だ我が願に適えり。我年朽ちたりと雖も猶故貪惜す。

即ち傍人を遣わして、急に追うて將いて還らしむ。爾の時に使者、疾く走り往いて捉う。窮子驚愕して、怨なりと稱して大に喚ばう、我相犯さず何ぞ捉えらるることを爲る。使者之を執うることを愈急に、強いて牽將いて還る。時に窮子自ら念わく、罪なくして囚執えらる、此れ必定して死せん。轉た更に惶怖し、悶絶して地に躡る。

父遙かに之を見て使に語つて言わく、此の人を須いじ、強て將いて來ること勿れ。冷水を以て面に灑いで醒悟することを得せしめよ。復與みし語ることなかれ。所以は何ん、父其の子の志意下劣なるを知り、自ら豪貴にして子の爲に難かるるを知つて、審かに是れ子なりと知れども、而も方便を以て他人に語つて、是れ我が子なりと云わず、使者之に語らく、我今汝を放す、意の所趣に隨え。窮子歡喜して未曾有なることを得て、地より起きて貧里に往至して、以て衣食を求む。

爾の時に長者、將に其の子を誘引せんと欲して、方便を設けて、密かに二人の形色憔悴して威徳なき者を遣わす。汝彼に詣いて徐く窮子に語るべし。此に作處あり。倍して汝に直を與えん。窮子若し許さば、將い來りて作さしめよ。若し何の所作をか欲すと言わば、便ち之に語るべし。汝を雇うことは糞を除わしめんとなり。我等二人亦汝と共に作さんと。

時に二りの使人即ち窮子を求むるに、既已に之を得て具さに上の事を陳ぶ。爾の時に窮子先ず其の價を取つて、尋いで與に糞を除う。其の父、子を見て慙んで之を怪む。又他日を以て窗牖の中より、遙かに子の身を見れば、羸瘦憔悴し、糞土塵坌汗穢不淨なり。即ち瓔珞・細軟の上服・嚴飾の具を脱いで、更

に麤弊垢膩の衣を著、塵土に身を塗し、右の手に除糞の器を執持して、畏るる所あるに狀れり。諸の作人に語らく、汝等勤作して懈怠すること得ること勿れと。

方便を以ての故に其の子に近づくことを得つ。後に復告げて言わく、咄や男子、汝常に此にして作せ、復餘に去ること勿れ。

當に汝に價を加うべし。諸の所須ある盆器・米麩・鹽酢の屬あり、自ら疑い難ることなかれ。亦老弊の使人あり、須

いは相給わん。好く自ら意を安くせよ。我汝が父の如し、復憂慮することなかれ。所以は何ん、我年老大にして汝小壯な

り。汝常に作さん時、欺怠・瞋恨・怨言あることなかれ。都て汝が此の諸惡有らんを、餘の作人の如くに見じ。今より已後、

所生の子の如くせん。即時に長者、更に與に字を作つて、之を名けて兒とす。爾の

時に窮子此の遇を欣ぶと雖も、猶故自ら客作の賤人と謂えり。是れに由るが故に、二十年の中に於て常に糞を除わしむ。

是れを過ぎて已後、心相體信して入出に難りなし。然も其の所止は猶お本處に在り。

世尊、爾の時に長者疾有つて、自ら將に死せんこと久しからじと知つて、窮子に語つて言わく、我今多く金・銀・珍寶有つ

て倉庫に盈溢せり。其の中の多少、取與すべき所、汝悉く之を知れ。我が心是の如し。當に此の意を體るべし。所以は何

ん、今我と汝と便ち爲れ異らず。宜しく用心を加うべし、漏失せしむることなかれ。

爾の時に窮子、即ち教敕を受けて、衆物の金・銀・珍寶及び諸の庫藏を領知すれども、而も一餐を恡取するの意なし。

然も其の所止は故お本處にあり。下劣の心亦未だ捨つること能わず。復少時を経て、父、子の意漸く已に通泰して、大志を

成就し、自ら先の心を鄙んずと知つて、終らんと欲する時に
 臨んで、其の子に命じ、並に親族・國王・大臣・刹利・居士を
 會むるに皆悉く已に集りぬ。即ち自ら宣言すらく、諸君當
 に知るべし、此れは是れ我が子なり、我の所生なり。某の
 城中に於て吾を捨てて逃走して、伶俚辛苦すること五十
 餘年、其の本の字は某、我が名は某甲。昔本城に在つて憂
 を懷いて推ね覓めき。忽ちに此の間に於て遇い會うて之を得た
 り。此れ實に我が子なり、我實に其の父なり。今吾が所有の一切
 の財物は皆是れ子の有なり。先に出内する所は是れ子の所知な
 り。
 世尊、是の時窮子、父の此の言を聞いて即ち大に歡喜し
 て、未曾有なることを得て、是の念を作さく、我本心に悋求す
 る所あることなかりき。今此の寶藏、自然にして至りぬといわ
 んが若し。

世尊、大富長者は則ち是れ如來なり。我等は皆佛子に似た
 り、如來常に我等を爲れ子なりと説きたまえり。世尊、我等三苦
 を以ての故に、生死の中に於て諸の熱惱を受け、迷惑無智にし
 て小法に樂著せり。今日世尊、我等をして思惟して諸法の
 戲論の糞を蠲除せしめたもう。我等中に於て勤加精進して、
 涅槃に至る一日の價を得たり。既に此れを得已つて、心大に
 歡喜して自ら以て足れりと爲し、便ち自ら謂うて言わく、
 佛法の中に於て勤め精進するが故に所得弘多なりと。

然も世尊、先に我等が心弊欲に著し小法を樂うを知しめし
 て、便ち縦し捨てられて、爲に汝等當に如來の知見・寶藏の分
 あるべしと分別したまわず。世尊、方便力を以て如來の智慧を説
 きたもうに、我等佛に従いたてまつりて、涅槃一日の價を得
 て、以て大に得たりとして、此の大乗に於て志求あることなか

りき。我等又如來の智慧に因つて、諸の菩薩の爲に開示演說せしかども、而も自ら此れに於て志願あることなし。

所以は何ん、佛我等が心小法を樂うを知しめして、方便力を以て我等に隨つて説きたもう。而も我等眞に是れ佛子なりと知らず。今我等方に知んぬ、世尊は佛の智慧に於て憍惜したもう所なしと。

所以は何ん、我等昔より來、眞に是れ佛子なれども、而も但小法を樂う。若し我等大を樂うの心あらば、佛則ち我が爲に大乘の法を説きたまわん。今此の經の中に唯一乘を説きたもう。而も昔菩薩の前に於て、聲聞の小法を樂う者を毀訾したまえども、然も佛實には大乘を以て教化したまえり。是の故に我等説く、本心に悋求する所あることなかりしかども、今法王の大寶、自然にして至れり。佛子の得べき所の如き者は皆已に之を得たり。

爾の時に摩訶迦葉、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

我等今日 佛の音教を聞いて

歡喜踊躍して 未曾有なることを得たり

佛聲聞 當に作佛することを得べしと説きたもう

無上の寶聚 求めざるに自ら得たり

譬えば童子 幼稚無識にして

父を捨てて逃逝して 遠く他土に到りぬ

諸國に周流すること 五十餘年

其の父憂念して 四方に推ね求む

之を求むるに既に疲れて 一城に頓止す

舍宅を造立して 五欲に自ら娛む

其の家巨に富んで

諸の金・銀・碑礫・礪石・眞珠・瑠璃多く

象・馬・牛・羊・輦輿・車乘 田業僮僕 人民衆多なり

出入息利すること 乃ち他國に徧し

商估賈人 處として有らざるることなし

千萬億の衆 圍繞し恭敬し

常に王者に 愛念せらるることを爲

群臣豪族 皆共に宗重し

諸の縁を以ての故に 往來する者衆し

豪富なること是の如くにして 大力勢あり

而も年朽邁して 益子を憂念す

夙夜に惟念すらく 死の時將に至らんとす

癡子我を捨てて 五十餘年

庫藏の諸物 當に之を如何すべき

爾の時に窮子 衣食を求索して

邑より邑に至り 國より國に至る

或は得る所あり 或は得る所なし

飢餓羸瘦して 體に瘡癬を生ぜり

漸次に經歷して 父の住せる城に到りぬ

備貸展轉して 遂に父の舎に至る

爾の時に長者 其の門内に於て

大寶帳を施して 師子の座に處し

眷屬圍繞し 諸人侍衛せり

或は 金・銀 寶物を計算し

財産を出内し 注証券疏するあり

窮子父の 豪貴尊嚴なるを見て

謂わく是れ國王か 若しは是れ王と等しきかと

驚怖して自ら怪む 何が故ぞ此に至れる

覆かに自ら念言すらく 我若し久しく住せば

或は逼迫せられ 強いて驅つて作さしめん

是を思惟し已つて 馳走して去りぬ

貧里に借問して 往いて傭作せんと欲す

長者是の時 師子の座に在つて

遙かに其の子を見て 黙して之を識る

即ち使者に敕して 追ひ捉え將いて來らしむ

窮子驚き喚ばい 迷悶して地に躡る

是の人我を執う 必ず當に殺さるべし

何ぞ衣食を用つて 我をして此に至らしむる

長者子の 愚癡狹劣にして

我が言を信ぜず 是れ父なりと信ぜざるを知つて

即ち方便を以て 更に餘人の

眇目・矬陋にして 威徳なき者を遣わす

汝之に語つて 云うべし當に相雇うて

諸の糞穢を除わしむべし 倍して汝に價を與えんと

窮子之を聞いて 歡喜し隨ひ來つて

爲に糞穢を除い 諸の房舎を淨む

長者牖より 常に其の子を見て

子の愚劣にして 樂つて鄙事を爲すを念う

是に長者 弊垢の衣を着

除糞の器を執つて 子の所に往到し

方便して附近し 語つて勤作せしむ

既に汝が價を益し 並に足に油を塗り

飲食充足し 薦席厚暖ならしめん

是の如く苦言すらく 汝當に勤作すべし

又以て軟語すらく 若我が子の如くせん

長者智有つて 漸く入出せしむ
二十年を経て 家事を執作せしめ
其れに金・銀 眞珠・頗黎
諸物の出入を示して 皆知らしむれども
猶お門外に處し 草庵に止宿して
自ら貧事を念う 我に此の物なしと
父子の心 漸く已に曠大なるを知つて
財物を與えんと欲して 即ち親族
國王・大臣 刹利・居士を聚めて
此の大衆に於て 説く是れ我が子なり
我を捨てて他行して 五十歳を経たり
子を見てより來 已に二十年
昔 某の城に於て 是の子を失いき
周行し求索して 遂に此に來至せり
凡そ我が所有の 舍宅・人民
悉く以て之に付す 其の所用を 恣にすべしと
子念わく昔は貧しくして 志意下劣なりき
今は父の所に於て 大に珍寶
并及に舍宅 一切の財物を獲たりと
甚だ大に歡喜して 未曾有なることを得るが如く
佛も亦是の如し 我が小を樂うを知しめして
未だ曾て説いて 汝等作佛すべしと言わず
而も我等 諸の無漏を得て
小乗を成就する 聲聞の弟子なりと説きたもう
佛我等に敕したまわく 最上の道
此れを修習する者は 當に成佛することを得べしと説けと
我佛の教を承けて 大菩薩の爲に

諸の因縁 種種の譬諭

若干の言辭を以て 無上道を説く

諸の佛子等 我に従つて法を聞き

日夜に思惟し 精勤修習す

是の時に諸佛 即ち其れに記を授けたもう

汝來世に於て 當に作佛することを得べし

一切諸佛の 祕藏の法をば

但菩薩の爲に 其の實事を演べて

我が爲に 斯の眞要を説かざりき

彼の窮子の 其の父に近づくことを得て

諸物を知ると雖も 心に憐取せざるが如く

我等佛法の寶藏を説くと雖も 自ら志願なきこと 亦復是の如し

我等内の滅を 自ら足ることを爲たりと謂うて

唯此の事を了つて 更に餘事なし

我等若し 佛の國土を淨め

衆生を教化するを聞いては 都て欣樂なかりき

所以は何ん 一切の諸法は

皆悉く空寂にして 無生・無滅

無大・無小 無漏・無爲なり

是の如く思惟して 喜樂を生ぜず

我等長夜に 佛の智慧に於て 貪なく著なく 復志願なし

而も自ら法に於て 是れ究竟なりと謂いき

我等長夜に 空法を修習して

三界の 苦惱の患を脱るることを得て

最後身 有餘涅槃に住せり

佛の教化したもう所は 得道虚しからず

則ち己に 佛の恩を報ずることを得たりとす

我等 諸の佛子等の爲に

菩薩の法を説いて 以て佛道を求めしむと雖も

而も是の法に於て 永く願樂なかりき

導師捨てられたることは 我が心を觀じたもうが故に

初め勸進して 實の利ありと説きたまわず

富める長者の 子の 志 劣なるを知つて

方便力を以て 其の心を柔伏して

然して後に乃し 一切の財寶を付するが如く

佛も亦是の如し 希有の事を現じたもう

小を樂う者なりと知しめして 方便力を以て

其の心を調伏して 乃し大智を教えたもう

我等今日 未曾有なることを得たり

先の所望に非ざるを 而も今自ら得ること

彼の窮子の 無量の寶を得るが如し

世尊我今 道を得果を得

無漏の法に於て 清淨の眼を得たり

我等長夜に 佛の淨戒を持つて

始めて今日に於て 其の果報を得

法王の法の中に 久しく梵行を修して

今無漏 無上の大果を得 我等今者 眞に是れ聲聞なり

佛道の聲を以て 一切をして聞かしむべし

我等今者 眞に阿羅漢なり

諸の世間 天・人・魔・梵に於て

普く其の中に於て 供養を受くべし

世尊は大恩まします 希有の事を以て

憐愍教化して 我等を利益したもう

無量億劫にも 誰か能く報ずる者あらん
 手足をもつて供給し 頭頂をもつて禮敬し
 一切をもつて供養すとも 皆報ずること能わじ
 若しは以て頂戴し 兩肩に荷負して
 恒沙劫に於て 心を盡くして恭敬し
 又美膳 無量の寶衣 及び 諸の臥具 種種の湯藥を以てし
 牛頭栴檀 及び 諸の珍寶
 以て塔廟を起て 寶衣を地に布き
 斯の如き等の事 以用て供養すること
 恒沙劫に於てすとも 亦報ずること能わじ
 諸佛は希有にして 無量無邊
 不可思議の 大神通力まします
 無漏・無爲にして 諸法の王なり
 能く下劣の爲に 斯の事を忍びたまう
 取相の凡夫に 宜しきに隨つて爲に説きたもう
 諸佛は法に於て 最自在を得たまえり
 諸の衆生の 種種の欲樂
 及び其の志力を知しめして 堪任する所に隨つて
 無量の論を以て 而も爲に法を説きたもう
 諸の衆生の 宿世の善根に隨い
 又成熟 未成熟の者を知しめし
 種種に等量し 分別し知しめし已つて
 一乗の道に於て 宜しきに隨つて三と説きたもう

妙法蓮華經卷第二